

論文

エルンスト・フォン・ヴィルデンブルッフの 『クヴィツォー兄弟』

河合 まゆみ

要旨

エルンスト・フォン・ヴィルデンブルッフは、現在ではほとんど忘れ去られた存在ではあるが、ヴィルヘルム2世治下の帝政ドイツを代表する劇作家の一人であった。自身ホーエンツォレルン家の血を引くヴィルデンブルッフは、新しく誕生したドイツ帝国の国民に祖国の歴史を知らしめることを劇作家としての使命と考え、一連の歴史劇を世に出した。とくに最初のホーエンツォレルン劇である『クヴィツォー兄弟』は、ベルリンで大成功をおさめ、ヴィルヘルム時代を象徴する作品となった。作者はこの作品で、15世紀初頭のブランデンブルクを舞台とし、土着貴族クヴィツォー家と新しい統治者ニュルンベルク城伯フリードリヒの対立を軸に、ホーエンツォレルン家初のブランデンブルク選帝侯フリードリヒ1世を、理想の支配者として描き出した。しかし、観客だった当時のベルリン市民の心をとらえたのは、貴族や諸侯からの抑圧に苦しみながらも、したたかにその時代を生き抜く作中のベルリン市民の活気に満ちた姿であった。

キーワード：エルンスト・フォン・ヴィルデンブルッフ マルク・ブラン
デンブルク ホーエンツォレルン クヴィツォー 歴史劇

0. はじめに

エルンスト・フォン・ヴィルデンプルッフは、ヴィルヘルム 2 世治下の帝政ドイツを代表する劇作家の一人であった。ドイツ・プロイセン史を取り扱った彼の連年の歴史劇は、しかしながら、同時代の自然主義作品の陰になり、今日ではもはや忘れ去られた存在である¹⁾。本稿で論じる『クヴィツォー兄弟』は、ベルリンで上演されると大成功をおさめ、文字通り作者の代表作となった。

以下では、まず、自身ホーエンツォレルン家の血を引く作者の生い立ち²⁾を簡単に振り返った後、時代背景と照らし合わせながら作品の内容を詳細に吟味し、なぜ『クヴィツォー兄弟』が当時のベルリンでそれほどの人気を博したのかを考察したい。

1. ヴィルデンプルッフの出自

1845年2月、エルンスト・フォン・ヴィルデンプルッフは、プロイセン総領事ルートヴィヒ・フォン・ヴィルデンプルッフの息子としてバイルートで生まれた。父親ルートヴィヒは、フリードリヒ大王の甥として有名なルイ・フェルディナント王子の庶子であった。つまりヴィルデンプルッフは、シュプレングルの造語を借りるなら、「四分の一、ホーエンツォレルン家の人間」(ein Viertel-Hohenzoller)³⁾であった。フェルディナント王子は、18世紀から19世紀にかけての激動のプロイセンにあって、伯父フリードリヒ大王ゆずりの才能に恵まれながら、1806年の対仏戦争で若くして殉教的な戦死を遂げたことで、まさに伝説的な存在となった人物である。ルートヴィヒは、3歳の時に父フェルディナント王子が戦死したため、王子の姉ルイーゼ王女(ラジヴィウ候夫人)に引き取られ、1810年、フリードリヒ・ヴィルヘルム 3 世からフォン・ヴィルデンプルッフという貴族の称号を与えられた。ルートヴィヒは長年軍務についた後、1841年、シリアのプロイセン総領事になり、外交官としての経歴をスタートさせた。また1837年には、養母ラジヴィウ候夫人の侍女であったエルネスティーネ・フォン・ランゲンと結婚し、5人の子供に恵まれた。エルンストは、5人のうち4番目の子供として生まれたのであった。1847年夏、エルンストが2歳の時、一家はしばらくの間、ベルリンに戻ったが、その後、アテネで2年間を過ごし、さらに1852年初めにはコンスタンティノープルへ移った。しかし1857年、母親が病気になったため、家族は再びベルリンに戻る。エルンストは一時、ハレの寄宿学校へ入ったが、1858年の母の死後はベルリンのギムナジウムに通った。1859年に父ルートヴィヒは職を辞し、ベルリンへ戻る。息子に軍人としてのエリートコースを歩ませたいと願っていた父の命で、彼はポツダムの軍の養成学校へ入る。そして1863年には少尉として、エリート部隊であるポツダムの第

一近衛連隊に配属される。しかし、ひどい近視ということもあり、彼は養成学校の頃から軍務に全く興味を持つことができず、むしろ作家の道を夢見ていた。決定的だったのが、1865年11月の連隊長が父親ルートヴィヒに宛てた手紙である。エルンストには並々ならぬ文学的才能が認められるが、軍人としての才能はないと連隊長は明言している⁴⁾。失望した父との話し合いの結果、彼は65年末に連隊をやめ、マゲデブルクのギムナジウムに通い始める。そして1867年にはベルリンの大学で法学を学び始める。法学を選んだのは、職業作家になることを頑として拒絶した父親との妥協の結果であろう。1870年には第一次国家試験に合格し、翌年からフランクフルト・アン・デア・オーダーの控訴審裁判所で見習い試補として働いた。そして1876年12月に、無事、試補試験に合格、1877年、まずエーバースヴァルデで補助裁判官として働き、その後まもなくベルリンの首都地方裁判所に移動した。4か月後の1877年7月、幸運にも外務省にポストを得て、1900年に公使館参事官としてやめるまでそこにとどまった。これで経済的な安定が保証されたわけで、彼は十分な余暇をすべて執筆活動に充てることができるようになった。

2. 劇作家としての出発と成功

ヴィルデンブルッフは1870年代、すでに英雄詩や短編小説を執筆していたが、1875年から彼の創作の中心となる歴史劇を書き始める。たとえば、11世紀の英国で、最後のアングロサクソン王ハーロルトとノルマンディー公ヴィルヘルムとの戦いを描いた『ハーロルト』、1809年のダンツィヒを舞台にメノー派教徒の青年が祖国愛と宗教的信条との板挟みになる『メノー派教徒』、カロリング朝のルートヴィヒ敬虔公をめぐる身内の離反、対立、抗争を描いた『カロリング王朝人』、1806年のイエーナ・アウエルシュテットの敗北から1813年の解放戦争までを舞台に、父親世代と息子世代の対立を描いた『父と息子』など、どの作品も祖国をめぐる戦いがテーマとなっている。作者は当然、作品を劇場に持ち込んだが、どの作品も上演にこぎつけることはできなかった。

一大転機となったのは、1881年3月、マイニンガー宮廷劇団による『カロリング王朝人』の上演である。マイニンゲン公ゲオルク2世が個人的に率いるマイニンガー宮廷劇団は、細部まで検証された舞台装置と、入念に時間をかけて行われるリハーサルに裏打ちされた群衆シーンで、1870年代、観客を魅了した⁵⁾。そのスタイルは、まさにヴィルデンブルッフの歴史劇にうってつけであった。『カロリング王朝人』の成功が契機となって、それまで様々な劇場から拒否されてきた作品が、ベルリンを始めとしてドイツ各地の劇場で次々と公演されるようになる。そして1884年には、グリルパルツァー賞を受賞し、さらに、シェイクスピアと同時代のイギリス人作家クリストフ・マーローを取り扱った同名の作品を発表、年末に

はシラー賞を受賞した。文字通り、「ドイツの最も称えられている作家の一人に数えられる」⁶⁾までになったわけである。しかし、11世紀のハインリヒ4世と教皇グレゴリウス7世との対立を背景に、ザクセンの反乱のなかでカトリックの独身制の問題を取り上げた新作『新戒律』は、文化闘争後の帝国内の政治状況を鑑み、王立劇場での上演を断られてしまう。ようやく1886年秋、この作品がベルリンの私設劇場でつましく初演を迎え、それにベルリン市民が大きな歓声で応えた時の感動を作者は次のように記している。

運命が私の中に入り込んできて、語りかけたような気分です。その言葉のうち私はただ一つしか理解できませんでしたが、……強くあれ、国民はお前を必要としているのだ……私をこんなにも喜ばせているのは、成功ではなく……私が身も心もあらゆる意味で属している国民が、私が提起した大きな心の問題を自身の心の問題としてくれたという意識です。……ドイツ国民、とりわけベルリン市民が、作家の中に、彼らを喜ばせたり、楽しませたり、元気づけたりしてくれる心を求めていることがわかって、私は神に感謝しています。大きな、途方もない義務感が私に重くのしかかっています。もはや自分自身に対してではなく、私の国民に対して果たすべき義務なのです。⁷⁾

ここで書かれているのは、ベルリン市民に対する義務を果たさなければという作者の想いであり、そこから生まれたのが最初のホーエンツォレルン劇『クヴィツォー兄弟』であった。

3. 最初のホーエンツォレルン劇——『クヴィツォー兄弟』

『クヴィツォー兄弟』は、15世紀初めのブランデンブルクを舞台に、土着貴族クヴィツォー家と新たに統治者として着任したニュルンベルク城伯フリードリヒとの対立を描き、最終的にホーエンツォレルン家によるブランデンブルク支配を祝福する作品となっている。この時代のブランデンブルクの勢力図は複雑すぎて、歴史劇の素材としては不向きであるとブラームも指摘しているように⁸⁾、作品理解のためには、まずその複雑な時代背景を把握しておく必要がある。ブランデンブルクの歴史を振り返ると、12世紀にアスカーニエン家のアルブレヒト熊伯が自ら初代ブランデンブルク辺境伯を名乗って以来、ヴィッテルスバッハ家、ルクセンブルク家が辺境伯となった。これらの君主はブランデンブルクに居住せず、支配権を確立できなかったため、領主貴族や都市は独立傾向を強めていった。またその間、1356年の金印勅書により、ブランデンブルク辺境伯に選帝侯の資格が付与された。1378年のカール4世の死後、辺境伯位を引き継いだのは次男ジギスムントであったが、彼は、ハンガリーでの王権の確立に手いっぱい、そのための財政支援と引き換えに、ブランデンブルク辺境

伯領を、1388年、従兄弟であるモラヴィア辺境伯ヨープストに担保として差し出した。15世紀に入り、一時期、ドイツには、ジギスムント、ヨープストを含め三人の国王が並存し、その権力関係は複雑を極めた。それがブランデンブルクの無秩序状態にさらに拍車をかけ、隣接する諸侯や司教たちとのいざこざ、戦闘が絶えなかった。そのなかで、土着貴族クヴィツォー家が台頭してくる。フェーデによる戦闘、婚姻、あるいは売買などによって、戦略上重要な城砦は次々と獲得していったクヴィツォー家は、ブランデンブルクにおける一大勢力となり、とくにディートリヒを長兄とする四兄弟の時代、一家は栄華を極め、1400年～1410年の10年間は「クヴィツォー時代」(Quitow-Zeit)⁹⁾と呼ばれる。しかし1411年にマルク伯ヨープストが死去すると、国王ジギスムントはニュルンベルク城伯フリードリヒを代行統治者として任命し(正式にマルク伯に任命するのは1415年)、1412年にフリードリヒがマルクへやってくる。クヴィツォー家はフリードリヒに忠誠を誓うことを拒み、両派は戦闘状態に入るが、1414年、クヴィツォー家の拠点であるフリーザック、プラウエの両城砦が陥落し、勝敗が決する。1411年から1414年にかけてのこの一連の出来事を、ヴィルデンブルッフは作品内で数週間の出来事に縮めており、舞台も、ベルリン、シュトラウスベルク、フリーザック、ブランデンブルク市近郊の4か所に絞り込まれている。

以下、4幕の歴史悲劇『クヴィツォー兄弟』の内容を順を追って見ていく。まず冒頭、ベルリン近郊の村が焼打ちにあい、人々がベルリンへと逃げてくるのが市壁の櫓から見える。この波乱を予感させるシーンで第一幕が始まる。一方、市庁舎の地下酒場では、ベルリンの二人の市長や参事会員たちが、オーダーベルクからの客たちをもてなそうとしている。ヨープストによって買い上げられた上等のワインが酒蔵にあると聞いた市長ペルヴェニッツは、それを自分たちで飲んでしまおうと言う。

やつは一体、誰の金でマルヴァシアワインを買ったと思う？われわれからまきあげた金でだぞ。あれからどのくらいたったんだ？明日でまる1年になるが、やつはわれわれを修道院通りの市庁舎に呼びつけて……そこに立って言っていたっけ「金をよこせ、善良な都市の市民たちよ、金をよこせ」……で、やつはわれわれに何と約束したっけか？やつが抵当に出した城をその金で買い戻すつもりなんだと。それが金を集めるとやつはどうした？われわれの金を鹿革の袋に詰め込んで、プラハに戻ってしまった。ついでにこの酒も買い置きしてな、で城の方はどうしたんだ？買い戻されたとでもいうのかね？
(157)

マルク伯ヨープストがまれにブランデンブルクにやってくるのは、金の無心のためだけで

あった。ジギスムントと国王の座を争っていたヨープストにとって、ブランデンブルクは大切な金づる以外のなにものでもなかった。また金のためには平気で都市や城砦を、クヴィツォーを始めとする貴族たちに担保として差し出した。後に登場するフリーザック城もヨープストがクヴィツォーに売却したものであった。オーダーベルクの市長は、ヨープストが市民に無断で、ポーランド人の貴族に担保としてオーダーベルクを与えてしまったと話し、ベルリン市長はそれに憤慨する。「オーダーベルクはドイツの都市だ。マルクの都市だ。それが今やそんなやつらのものになってしまうなんて！」(162) 自分たちの土地がよそ者に支配されることへの強い憤りが感じられる。自身よそ者のマルク伯ヨープストも、彼が送りこんでくる傭兵隊長も「誰も彼もまったくの役立たずであった」(167)。そしてベルヴェニッツはクヴィツォーこそマルクの傭兵隊長になるべきだと言う。これにはみな驚き、鍛冶屋の親方シュトロバントが激しく異議を唱える。彼はクヴィツォーを、いわゆる「盗賊騎士」(Raubritter)¹⁰⁾として恐れ、嫌悪し、敵とみなしていた。「やつらは村を襲い、家々に火をかけ、人々を追い出し、取り入れ前の穀物を馬で踏み荒らすんだ」(167)。これが、当時の一般的なクヴィツォー像であった。それに対して市長のベルヴェニッツは、「彼には気骨がある」(164)と、一貫してクヴィツォーを弁護する¹¹⁾。

しかし、私が彼についてこの目で見、この耳で聞いたところでは、彼は戦場の英雄で、彼の家来はみな彼のためならどんなことでもするし、彼には考えがあって、ひとにへつらうことはないし、彼が言うことは筋が通っている。……すごい男が一人いれば、すべてがその人物から始まるんだ。あらゆる悪いこともそうだし、またあらゆる良いこともそうなんだ。これが私の意見だ。(168)

そこに鍛冶職人のケーネ・フィンケが、ディートリヒ・フォン・クヴィツォーからの手紙を持って登場する。彼は、ポンメルン兵たちにつかまり、殺されそうになっていたところを、ディートリヒに助けられたのだった。ディートリヒは、ベルリンの監督教区長オルトヴィンにあずけられている弟コンラートの身を案じている。もし弟の身に何かあったらベルリンを火の海にするが、弟に手を出さないと約束するなら、ポンメルン人をマルクから追い出すのに手を貸す用意があるのだが、とベルリンにもちかけてきた。この申し出を聞いたベルリン市民は、「皇帝は我々を見捨てた。マルク伯も同じだ。我々はまもなく自らの五体以外、何も持たなくなる。誰も我々を助けてくれはしない。自分たちで何とかしよう。」(180)と立ち上がるのだった。

一方、ポンメルン軍に襲われたシュトラウスベルクから、市長トーマス・ヴィンスと市民たちが着の身着のままベルリンへと逃げてくる。皇帝もマルク伯も自分たちのためには何も

してくれないので、もはや神に助けを請う以外にないとヴィンスは跪き、神に訴える。

人は何も知ろうとしない／エルベ川とオーダー川の間土地について……／我々の土地は醜く、砂だらけだと人は言う／しかしあなたがこの砂ばかりの土地を創られたのです。そしてあなたがこのマルクに人を住ませられた／われわれは他の人と同様に肉と骨からできています／もしパンを奪われれば我々は飢えるほかありません／権利や家や衣服を奪われれば／我々は他の人と同様、裸で凍えるのです／……ですから、我々を助けてください／マルクを見捨てないで。助けてください。(196)

現実にシュトラウスベルクがポンメルン公と手を組んだクヴィツォーに火矢で攻撃されたのは1402年のことで、市の人口が三分の一になってしまったほど壊滅的な有様だったようである¹²⁾。ベルリンの牧師のもとで教育を受けたコンラートは、シュトラウスベルクの人々の惨状に強く心を打たれ、涙を流す。その彼に、市長ベルヴェニッツは、クヴィツォーがこの地に与えた深い傷跡を癒すことができるのは、ほかならぬクヴィツォーしかいないと同盟をもちかける。彼は市長の手を取り、この申し出に感動する。

同国人！ そうだ！／同国人、ああ、なんと広くて暖かい世界が／この言葉に込められていることか！われわれの運命は一つ／苦しみも喜びもともに／私の心は高揚し、善行に向かって心は大きく実り豊かになる／私は君たちと同様にマルクの子だ、君たちを愛している！ (207)

一同、シュトラウスベルクに向けて出立し、幕が下りる。

第二幕の前半、舞台はシュトラウスベルクの市庁舎、ポンメルン軍の陣営である。ポンメルン・シュテッティン公兄弟と部下の貴族たちが、「同盟者であって、家来ではない」(216)と豪語するディートリヒの傍若無人な振る舞い、さらにはシュトラウスベルク攻略の際の勝手な行動を非難する。するとディートリヒは、逆にポンメルン公たちの臆病ぶりを揶揄する。

戦いを始めた方がいいが、いざとなると戦いを恐れるようなやつほど臆病なやつをおれは知らない！どっちつかずほど軽蔑すべきことはない！……シュテッティンへ帰って、戦術のいろはを習ってきたらどうだ。ディートリヒ・クヴィツォーと共に戦場へ出るという名誉にあずかるのはその後だな。……そう！ほら吹きで、未熟な子供なのさ！ナイフ

で遊ぶように、戦争で遊ぶようなやつはな！選帝侯だから、自分と敵との間に、犠牲になることを厭わない多くの忠実な人々がいると思って、敵をあなどってかかるようなやつも同じことさ！（217f）

この場面では、卓越した戦士としてのディートリヒが前面に出てくる。そして、その場に居合わせた、ポーランド王の娘バルバラは、許嫁のポンメルン公を見限り、「最も偉大な戦士」（213）であるディートリヒのもとに走る。マルクの軍勢がやってきたという知らせに慌てて撤退するポンメルン公たちを軽蔑しながらディートリヒは言う。

おれは選帝侯どもの友人になどなりたくもない／頭に王冠を戴くすべてのものをおれは憎む／自分がいるここではおれの自由がおれの帝国だ／……／自然はおれの男らしさを／王冠としておれの頭に載せた — どこにいるというのだ／おれよりも選帝侯にふさわしいやつが（221）

ポーランド人としてドイツ人を憎んできたバルバラは、自分の抱いてきたドイツ人のイメージを覆すような男らしく強大な戦士であるディートリヒを「王冠のない王」（221）と称える。このアマゾネス的存在のバルバラは、作者が考え出した登場人物であり、後の兄弟の決裂の直接原因となる。

そこにコンラートとベルリンの二人の市長がやってきて、10年ぶりの兄弟の再会が描かれる。コンラートは熱に浮かれたように同盟について語る。

ああ、兄弟／あの人々の愛情を恥じないでくれ／かれらは国の運命をあなたにゆだねたのだ／あなたがその運命を導いてくれるように！あなたの国の救いの神になってくれ／国民があなたに信頼を寄せている／いまやあなたはブランデンブルクで最強だ／来てくれ、来てくれ、かれらはあなたを待っている、この時／あなたは国民の英雄になる（229）

ディートリヒは、久しぶりに再会した弟の情熱に一瞬惑わされそうになるが、バルバラがそれを阻む。彼女が愛したのは荒々しい戦士クヴィツォーであって、ベルリン市民に飼いならされたクヴィツォーではなかった。ベルリン市民は、今でこそ自分たちを敵から守ってくれる「勇敢なクヴィツォー」（231）を必要とするが、いずれ平和が訪れたなら、「厄介者」（231）としてさっさと放り出すにきまっている、そう彼女はディートリヒを諭す。我に返ったディートリヒは、「クヴィツォーと同盟だと？商人根性のやからが何をぬかす。こっちがお前らと同盟を結んでやるんだ — お前たちに結んでもらうわけではないんだぞ！」（232）と叫

び、クヴィツォーとベルリンの同盟が、最初から思惑の違いを孕んだ危ういものであることが暗示される。実際にベルリンが、クヴィツォーと同盟を結ぼうなどという「グロテスクでほとんど革命的な考え」¹³⁾にいたったのは1404年のことで、ベルリンはディートリヒの指揮のもとシュトラウスベルクに攻め入り、ポンメルン人から都市を奪回している。

第二幕後半は場面がベルリンの市庁舎にかわり、ディートリヒやほかのマルクの貴族たちを招いた華やかな祝宴が開かれている。そこへマルク伯ヨープストの死の知らせがもたらされる。ディートリヒは「われわれにはもはや主人はいない。今やわれわれは自由だ」(246)と歓声を上げ、一同は酒杯をかわす。続いて国王ジギスムントの使者が訪れ、ヨープストが死去したことでブランデンブルクは再び国王の手に戻ったが、国王は自らこの地に出向くことはできないため代理統治者を置くことになった旨を伝える。それに対してディートリヒは、代理統治者にではなく国王に直接統治してほしいと訴える。その理由を問われて、

なぜなら、われわれは一人前だからだ／なぜなら、われわれは自分たちで耕す大地を／
自ら治めたいからだ。だからだ。／われわれはもうたくさんだからだ、マルク・ブラン
デンブルクが／ベーメンから来た金目当ての悪党どもに／売りつけられることに、やつ
らは自分の財布を／われわれのところで満たしたいだけなのに、だからだ、だからだ。
(251)

新しい統治者はニュルンベルク城伯フリードリヒだと知らされて、

彼はわれわれのことを知っているのか？／彼は今日までわれわれのことを何か尋ねてき
たことがあるか？ない！／彼はフランケンの土地に住み／顔をしかめてきたんだ、ほか
のやつらがするように／南部の領主たちが、もし聞いたなら／ルーフとブルッフの間の
砂箱のはなしを／しかしわれわれはこの砂地に生まれ／われわれの血を肥やしとして
やってきたのだ／だからここはわれわれのものだ。われわれが主人だ。(252f)

みずからマルク伯になりたいのかとからかい半分に問われて、ディートリヒは、「マルク伯になりたいとは思わない。そう思うにはあまりに誇り高すぎる。クヴィツォー家のディートリヒで私はいたい、そして自由でいたいのだ」(253)と答える。実在のクヴィツォーも自身マルク伯になりたいという願望を抱いていたとはとても考えられない。決まりや義務で縛られることを嫌い、あくまでも自由な戦士でいたいディートリヒを、「気まぐれと暴力の男」(254)と決めつけた使者は、14日後にブランデンブルク市に来てフリードリヒに忠誠を誓うように、と言い残して立ち去る。

ディートリヒはフリードリヒへの不服従を断固として宣言し、居合わせた人々にも同様に剣にかけて誓うよう求めるが、即座にそれに応じたのは弟のコンラートだけであった。貴族たちは即答を拒み、ベルリン市長は強いられて不服従を誓おうとした刹那、トーマス・ヴィンスがそれを止める。ディートリヒはフェーデの権利によって、シュトラウスベルクの市長であるヴィンスは自分に隷属すると主張し、「略奪者、暴君！」(258)と罵るヴィンスを、ベルリン側の激しい抗議を無視して捕え、フリーザック城に連行してしまう。

第三幕の冒頭、ヴィンスの妻ゲルトルートと娘アグネスは捕えられた父を救おうとフリーザック城へやって来る。助けを求められたコンラートは、妻子の嘆きに免じてヴィンスを許してやってほしいと兄に訴えるが、クヴィツォー家の人間を侮辱した者を許すことはできないと突き放される。あくまでもクヴィツォー家の人間として誇り高く、自由であろうとする根っからの戦士ディートリヒに、コンラートは、「マルクの子よ」(270)と呼びかけ、「祖国に対する義務」(270)を果たすよう説得する。しかしディートリヒにとって、「義務、国民そして祖国」(270)という言葉は束縛しか意味しなかった。結局兄弟は決裂し、コンラートはヴィンスの妻子を連れ、ブランデンブルク市へ向かうのだった。

後半、舞台はブランデンブルク市近郊の丘へと移る。早朝、フリードリヒは陣営の天幕から出て、一人、ブランデンブルクの街並みとハーフェル川を眺めながら独白する。

あなたが私にこの地を示された／全能の神よ、私自身の胸から／私は、意志と力と愛に満ちた心臓を取り出し／それをこの地に植えよう／実りをつける種のように／そうすれば将来、もはやだれも分かつことはできない／ブランデンブルクがホーエンツォレルンから受け取るものと／ホーエンツォレルンがブランデンブルクに負うものとを (275)

彼はひざまずき、大地から一握りの砂を拾い上げて言う。

私はお前に忠誠を誓おう、ブランデンブルクの土地よ／そうだ、お前は貧しい、お前を飾る山もなければ／豊かな草原もあふれる緑もない／お前の息子たちこそ、お前の娘たちも／お前の富のすべてである — 私にお前の民を贈ってくれ／マルクの土地よ、私はお前と契りを交わそう／犁をわが手に取ろう／干からびた土地よ、豊かになれ／鋼が鍛えられるところに男たちが育つ／義務が果たされるところに感謝の念が芽生える／愛の種がまかれるところに忠誠がよみがえる (276)

フリードリヒがブランデンブルクの土地とホーエンツォレルン家を結びつけるこのシーン

は、公演の際、フリードリヒが救世主に見えるよう演出が施されたそうである¹⁴⁾。ブランデンブルク市についたコンラートは、偶然出会ったフリードリヒにヴィンスの妻子を託した後、その王者の風格に愕然とし、逃げるように立ち去る。貴族や都市の代表者たちが続々と集まってくるが、彼らの胸中をペルヴェニッツが次のように代弁する。

彼を遣わしたのは皇帝ジギスムントだ。われわれにヨープストを送り込んだのも皇帝ジギスムントだ。皇帝ジギスムントが一本の木なら、その木は今日まで酸っぱい実しかつけたことがない (283)

新しい統治者に何も期待していなかった人々は、良い意味で裏切られることになる。ベルリン市民は意外にも、ヴィンスをみすみすディートリヒの手に渡したこと、さらにヴィンスの妻子に何もしてやらなかったことをフリードリヒから責められ、戸惑う。そしてフリードリヒは集まった人々の前でおごそかに宣言する。

みな、聞き知るように／私をここに遣わしたのは人間の気まぐれではなく、神の意志である／人の涙を数えられる神の／神は私に言った、この地には多くの支配者がいるが／君主はいない、裁判官はいるが、権利がない／この国には畑はあるが、種はない／剣と槍はあるが、犁はない／……／この地に平和を、その子供らにはパンをもたらすよう／馬の蹄から畑地を守るよう／大火から貧しい小屋を守るよう／その聖なる使命を私は授かった／人々よ、私はその聖なる使命を受け入れよう／……／ここに私は私の旗印を立てよう／お前の心臓部に、この旗印のはためくところが／聖なる土地、ここが祖国だ／そして私が自ら忠誠を誓ったように／一門の最後の子孫にいたるまで／私はこの旗印への忠誠を要求する／私は命じる、祖国に忠誠を！ (290f.)

すべての貴族、都市、最後にベルリンがフリードリヒに忠誠を誓う。

そこにディートリヒが突然現れる。彼は服従の誓いを拒否し、フリーザック城が陥落したら忠誠を誓うと、宣戦布告する。フリードリヒはヴィンスの解放を要求するが、ディートリヒはフェーデの権利を楯に正当性を主張したため、フリードリヒは皇帝の名においてディートリヒを追放する。兄をかばおうと現れたコンラートは、「お前も私の敵になりたいのか」(296)とフリードリヒに問われ、

あなたの敵？あなたの敵？望み、憧れ、待ちわびていた／私は昼も夜も夢見ていた —
／夢が現実になった — その人が現れた、その人が近づいてきた／救世主だ — その彼が

敵として来るとは！／私があなたの敵？それは自然に反する／私があなたの友？それは自然に反する／……／私に逃げ道を！もしないのなら／ならば、最後の手段だ、私に死を！ (296)

と言って崩れ落ちる。

最終の第四幕、前半の舞台はベルリンである。ヴィンスの妻子は鍛冶の親方シュトロバントの家に世話になっている。ベルリンの軍隊は明日、フリーザック城へ向けて出発する。アグネスはフリーザックにいるコンラートのことを想い、嘆き悲しむ。一方、シュトロバントは市長ペルヴェニッツの口添えで、娘リーケとフィンケの仲を許す。男たちはフリードリヒのために乾杯する。

後半の舞台は敵に包囲されたフリーザック城にかわる。フリードリヒが、チューリンゲンから持ってこさせた射石砲で攻撃してくる。それを見てディートリヒは、

全部が膨れた胴体と大きく開いた口だけで／高貴なところなど何一つない。いいや、あれは武器などではない。／これはもう戦いではない。戦いとは、男たちのなりわいで／勇気が決するものだ。今や戦いは卑しいものになってしまった／臆病な抜け目なさが愚かな勇気を笑っている／死は英雄で、戦場を自由に駆け巡った／いまや人殺しが隠れて待ち伏せている (314)

と嘆き、ディートリヒの時代の終焉が暗示される。

そこへバルバラが駆けつけ、ポーランド王が援軍を出したと知らせる。ディートリヒはポーランド軍と同盟し、フリードリヒ、ひいてはブランデンブルクに復讐を決意する。そしてコンラートに先陣を切るよう命じるが、彼は、「ブランデンブルクの貴族である私にスラヴ人の下僕になりさがれというのか」(319)と拒絶する。

もはやお前の弟などではない、私はお前から取り上げる／兄弟の名前を、私はお前から取り上げる／われわれの祖先の名前を、私はお前から取り上げる／ブランデンブルクの、ドイツの名前を／お前が卑しめたのだ、お前はスラヴ人になってしまったのだ。(319)

そこへフリードリヒの使者が来て、ヴィンスの引き渡しを要求する。ディートリヒは自ら剣を抜いてヴィンスを殺そうとするが、コンラートが止めに入る。そのコンラートを、

ディートリヒは「ホーエンツォレルンの下僕」(321)とものしる。しかしコンラートは、信じられないような力を出して兄を押し返し、そして剣を取って兄を倒す。そして直後、忠実な侍従に、短剣で自分の胸を突かせ、駆けつけたフリードリヒの腕の中で、「ホーエンツォレルン！」(324)と叫んで息を引き取るのだった。

『クヴィツォー兄弟』は、ヴィルヘルム 2 世の即位の数か月後の 1888 年 11 月 9 日に初演され、ヴィルヘルム 2 世の退位直前の 1918 年 10 月 30 日の最後の公演まで、その公演回数は 273 回にのぼった¹⁵⁾。まさにヴィルヘルム時代の帝政ドイツを象徴する作品と言える。皇帝は 1889 年 1 月 4 日に『クヴィツォー』を観劇している。これは、父フリードリヒ 3 世の喪が明けてから最初の観劇でもあった。皇帝は終始上機嫌で、観劇後、「親愛なるヴィルデンブルッフ、我々が必要としているのは、まさにこういう作品だ。私は、あなたが私の使命を軽くしてくれることに感謝する」¹⁶⁾と作者に声をかけたそうである。この作品がいかにか皇帝の意に沿うものであったかを表すように、1 月 27 日、皇帝の誕生日の前夜、学童のための祝賀公演でも『クヴィツォー兄弟』が上演された。ヴィルヘルム 2 世にとって、作品中のフリードリヒはまさに理想の支配者像であり、ブランデンブルクにおけるホーエンツォレルン家の支配を正当化するものであった。しかし史実はそうではない。このあたりをハフナーから引用する。

たとえば第六代ニュルンベルク城伯は、その後(1415年)ホーエンツォレルン家初のブランデンブルク辺境伯となるのだが、その外交上の器用さによって、国王選挙でジギスムントを助けて勝利させ、その助言者および仲介者として出世した。ブランデンブルク辺境伯領は、その褒美であった。真に王者の褒美であり、格段の昇進であったが、それはまた、褒美を与えられ、昇進させられたものが、間もなく負担としか感じなくなる重荷でもあった。彼は、その地の反抗的な貴族たちとの不愉快でひどく無益な戦いに落胆し、すぐにマルクを立ち去ることになった。彼の息子もまた、その地に最期まで留まることはできず、第三代ホーエンツォレルン家辺境伯は、その地に足を踏み入れることもなかった。……ようやく四代目になってホーエンツォレルン家はそこに根を下ろし、良くも悪くもほかの諸侯と同じように、君主らしく統治した。¹⁷⁾

第三幕後半のフリードリヒの独白では、ブランデンブルク辺境伯領は神からの贈り物となっていたが、実際には、1410年の国王選挙でフリードリヒがジギスムントに投票したことへの褒美であった。帝国の僻地にフリードリヒは特別な愛情は覚えなかっただろう。彼も先代ヨーブストと同じく、時折、ブランデンブルクに滞在するだけで、1425年にマルクの支配

権を息子に譲った後は、1826年を最後にもはやブランデンブルクを訪れることはなかった。またフリードリヒのもとでブランデンブルクに平和がもたらされることもなかった。

ヴィルデンブルッフは『クヴィツォー兄弟』を書くにあたり、歴史的資料としてクレーデンの『皇帝カール4世から初代ホーエンツォレルン君主に至るまでのマルク・ブランデンブルク、あるいはクヴィツォー家とその時代』を用いた¹⁸⁾。クヴィツォーを題材にした19世紀の小説や戯曲は、ほとんどがこの資料に拠っている。19世紀後半、ドイツにおけるプロイセンの主導権が強まるにつれて、クヴィツォーをテーマにした文学や絵画が多く見られるようになるが、そこで描かれているのは、いわゆる「盗賊貴族」としてのクヴィツォーと、平和や秩序、公正の体現者としてのフリードリヒ1世という図式である¹⁹⁾。そしてクレーデンの著作も、この「善対悪」のステレオタイプの定着に貢献してきた。しかしヴィルデンブルッフの『クヴィツォー兄弟』には、他のクヴィツォー作品とは異なった特徴が見られる。作者が史実にどのように手を加えて作品を作り上げていったのかを簡単に見ていくと、まず、現実のクヴィツォー兄弟が、ディートリヒ、ヨハン、コンラート、ヘニングの4兄弟であり、歴史上の「クヴィツォー時代」を築いたのは、上の二人の兄弟であった。ディートリヒとヨハンはともに野心的で、戦闘を好み、婚姻によって一族の勢力を拡大した。三男のコンラートは兄弟のなかでは最も穏やかな性格であったが、若くして事故で水死した。歳離れた末弟ヘニングは、まずハーフェルベルクの修道院学校で学び、後にパリの大学で学んでいる。つまり作者は、現実のクヴィツォー4兄弟の上の二人からディートリヒを、下の二人からコンラートを生み出したわけである²⁰⁾。またその際、ディートリヒを「盗賊騎士」として一方的に悪者に仕立てていないところも特筆に値する。少なくとも第2幕でヴィンスを強引に捕縛するまでのディートリヒは、市長ペルヴェニッツも認める気骨ある戦士として描かれており、登場人物のなかで一番強烈な印象を観客に与える²¹⁾。ちなみに、シュトラウスベルク市長ヴィンスの捕縛は、史実にはない。その兄に比べ、弟コンラートの人物像に関しては批評でも意見が分かれている。リッツマンは「作者の卓越した力から生まれた敵対者」²²⁾と高く評価するが、一方で、15世紀初頭のマルク貴族が一族の利害を無視し、祖国への愛を優先すること自体が現実離れしているという批判もある²³⁾。

結末に関して言えば、実際のクヴィツォー兄弟はフリードリヒとの戦いで命を落としてはいない。ディートリヒはフリーザック城陥落の際、寸でのところで敵の手を逃れて脱出し、その後故郷を離れ、1417年に孤独のうちに亡くなった。一方、次兄ヨハンはプラウエ城陥落の際、フリードリヒの捕虜となるが、後に忠誠を誓い解放されている。したがって、ディートリヒがブランデンブルクを去るという結末も考えられたであろうが、作者はディートリヒをコンラートに殺させた。兄弟が争うストーリーは他のクヴィツォー作品にもみられるが、この結末はきわめて特異である。しかも兄殺しの直接の原因は、ディートリヒとポー

ランドとの同盟で、これは歴史的にはなかった話である。そこからは明らかに作者の反ポーランド感情が読み取れ、批評家からも問題視されている²⁴⁾。

さて、この作品がベルリンの劇場で大成功を収めたのは、もちろん皇帝の愛顧の後ろ盾もあったろうが、当時のベルリン市民が熱狂的に作品を受け入れたからである。その理由は、フリードリヒやクヴィツォー兄弟よりむしろ、第1幕、第2幕を中心に描き出されるベルリン市民の闊達な描写にある。「市壁の後ろにいるやつらのなかでは……ベルリン人が一番気に入っている」(176)とディートリヒに言わせるほど、登場する市長や参事会員たちにはみな気概があり、市民としての誇りがある。さらにベルリン市民がベルリン方言を話すこと²⁵⁾、また「ヴィルデンブルッフにしては驚くほどもったいぶらない言葉使い」²⁶⁾も成功の大きな理由であろう。そこで市民を代表して登場するのが市長ベルヴェニッツである。彼は、その政治的指導力で市民を引っ張り、同時に人情の機微にも通じており、ディートリヒ、フリードリヒと並ぶ三人目の主役と言える²⁷⁾。またベルヴェニッツ以上に観客の目も批評家の目も集めたのが、鍛冶職人フィンケである。いわゆる下層の人々の言葉で話し、実直で勇気があり、抜け目ない当時の職人像を体現している。ポンメルン兵に殺されかけた時、彼の減らず口を耳にしたディートリヒが、「ベルリン人に違いない。ベルリン人しかそんな口のきき方はしないからな」(174)と助けてくれたのだった。さらに彼は貧しい人たちの代弁者でもある。第三幕後半、フリードリヒの元へ集まった人々に、

あの天幕が見えるだろ、黒と白の、あれがホーエンツォレルン家の色ってやつさ。俺はあの色が好きなんだ。俺は鍛冶職人だからな、鍛冶場の仕事を始めれば、顔も手も真っ黒だ — それの仕事だ — その後、仕事が終われば、手も顔も洗って白にもどる — それの仕事のあとの安らぎ、満足だ。だからわかるのさ、そんな色を持っている人は、労働の何たるかがわかるし、貧しい人たちが何を必要としているのか知っているし、国民のための心を持っているのさ。(286)

フィンケは第四幕前半で、シュトロバント親方にその娘リーケとの仲を認めてもらい、再び職人として受け入れてもらう。作品中で描かれる恋物語のなかでは唯一のハッピーエンドである。同時代の定評ある劇評家フォンターネも、ヴィルデンブルッフの素晴らしい思いつきの例として、このフィンケという登場人物をあげている。ケーネ・フィンケの名は、ポンメルン地方の古いバラードに登場するものであり、ヴィルデンブルッフはそこからインスピレーションを得て、「陽気で澁刺とし、作品にはまっけて、より良き明日にあこがれる貧しい人々の声を代弁する」²⁸⁾人物を作り上げたとして、フォンターネは作者の才能を高く評価する。フォンターネは、それまでのヴィルデンブルッフの作品には一貫して否定的な態度

を取ってきたが、この『クヴィツォー兄弟』では一転して「天賦の才の作品」²⁹⁾と称賛した。フォンターネは自身作家であり、ブランデンブルクの歴史に精通していただけに、この評価には重みがある。

4. おわりに

ヴィルデンブルッフをホーエンツォレルン家おかかえの「宮廷作家」(Hofdichter)³⁰⁾と見なす批評家も少なくない。その評価が不当であるとは言えないが、最初のホーエンツォレルン劇『クヴィツォー兄弟』が大成功をおさめ、ヴィルヘルム時代を象徴する作品となり得たのは、作中に描き出された15世紀初頭のベルリンの鮮やかなパノラマが、当時の観客に熱狂的に受け入れられたからである。ヴィルデンブルッフは、「この国民に、自分たちの歴史の一コマを見せる」³¹⁾ことを使命と考え、『クヴィツォー兄弟』を書き上げた。その意味での作品は、ベルリン市民への作家からの「オマージュ」(Hommage)³²⁾であった。

注

テキストは Wildenbruch, Ernst von: Gesammelte Werke in 16 Bänden. Hrsg. von Berthold Litzmann. Berlin (Grottesche) 1911-1924. (以下略GW) を使用。『クヴィツォー兄弟』の引用はすべて第9巻から、本文中、引用後の括弧内に頁数のみ記す。

- 1) ヴィルデンブルッフのドイツ文学史上での扱いに関しては、Vgl. Ketelsen, Uwe-K.: Ernst von Wildenbruch: Die Quitzows. In: Deutsche Dramen—Interpretationen zu Werken von der Aufklärung bis zur Gegenwart. Hrsg. von Harro Müller-Michaels. Band 2, Königstein/Taunus 1981, S.24-41, hier S.25.
- 2) ヴィルデンブルッフの出自に関しては主に以下の書籍を参照した。Litzmann, Berthold: Ernst von Wildenbruch. 2 Bände, Berlin 1913-1916, hier Bd.1, S.1ff. Leutert, Torsten: Ernst von Wildenbruchs historische Dramen. Frankfurt a.M. 2004, S.13ff.
- 3) Sprengel, Peter: Geschichte der deutschsprachigen Literatur 1870-1900—Von der Reichsgründung bis zur Jahrhundertwende. München 1998, S.485.
- 4) Vgl. Litzmann: a.a.O., Bd.1, S.67.
- 5) Vgl. Leutert: a.a.O., S.23ff.
- 6) Berg, Leo: Ernst von Wildenbruch und das Preußenthum in der modernen Litteratur. Berlin 1888, S.1.
- 7) GW. Bd.8, S.XVI.
- 8) Vgl. Brahm, Otto: Kritische Schriften über Drama und Theater. Hrsg. von Paul Schlenther. Berlin 1913, S.219.
- 9) Feustel, Jan: Die Quitzows. Raubritter und Gutsherren. Berlin 2008, S.30.
- 10) ゲーテの『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』がまず思い起こされるが、ブランデンブルクで

- はクヴィツォー兄弟が「盗賊騎士」の典型と見なされた。
- 11) ベルヴェニッツはクレーデンによれば、1404年にベルリンがディートリヒを歓待した時の市長として記述されている。それを作者はクヴィツォー最員の第一市長として作品の前面に押し出した。Vgl. Klöden, Friedrich von: Die Mark Brandenburg unter Kaiser Karl IV. bis zu ihrem ersten Hohenzollernschen Regenten, oder: Die Quitzows und ihre Zeit. 4 Bände. Berlin 1836–37, hier Bd.2, S.151.
 - 12) Vgl. Feustel: a.a.O., S.30f.
 - 13) Ebd., S.34.
 - 14) Vgl. Kiefer, Sascha: Dramatik der Gründerzeit—Deutsches Drama und Theater 1870–1890. St. Ingbert 1997, S.173.
 - 15) Vgl. Ebd., S.172.
 - 16) Litzmann: a.a.O., Bd. 2, S.60.
 - 17) Haffner, Sebastian: Preußen ohne Legende. 10. Aufl. München 1998, S.59f.
 - 18) クレーデンのこの著作は厳密な意味での歴史的資料とは言い難い。これに関しては、Vgl. Bergstedt, Clemens: Die Quitzows im Bild der märkischen Geschichte. Berlin 2011, S.28.
 - 19) Vgl. Ebd., S. 12ff.
 - 20) Vgl. Leutert: a.a.O., S.90f.
 - 21) ディートリヒは、シラーのヴァレンシュタイン、ゲーテのゲッツなどとよく比較される。ヴィルデンブルッフをかれらのエピゴーネンと見なす批評家も多い。
 - 22) Litzmann: a.a.O., Bd.2, S.55.
 - 23) Vgl. Leutert: a.a.O., S. 102.
 - 24) Vgl. Ketelsen: a.a.O., S. 29.
 - 25) ベルリン市民は方言で話す、シュトラウスベルク市長は標準語の韻文で話すというような言語的不統一をブラームは指摘している。Vgl. Brahm: a.a.O., S.221.
 - 26) Kiefer: a.a.O., S.177.
 - 27) フィンケはどの批評家も必ず注目し、言及する登場人物である。Vgl. Ketelsen: a.a.O., S.35.
 - 28) Fontane, Theodor: Werke, Schriften und Briefe. Herg. von Walter Keitel und Helmuth Nürnberger. Abteilung III. Bd.2. Theaterkritiken. München 1962, S.782.
 - 29) Ebd., S.779.
 - 30) Kiefer: a.a.O., S.174.
 - 31) Leutert: a.a.O., S.85.
 - 32) Kiefer: a.a.O., S.175.